【秤（はかり）】

實は、自宅の破損個所の修復など、自分のことは自分で行う、とても几帳面な人でした。手紙の返事も、どんなに忙しい時でも僅かな時間を利用しては自分で書き、宛名も自署したうえで、自分で出していたほどです。郵送する際、重さを確認するために使用した「秤」が今回ご紹介する“イッピン”です。秤の棒は鉄製で、長さ 27.5 ㎝。瓢箪型をした木製ケースと二百匁（およそ 62.5ｇ）の分銅、天秤皿がそれぞれ１つずつ付いています。

量りたい物を皿に載せ、反対側に釣るした分銅を左右に動かし、分銅の目盛の位置で重さを知ります。

―「山のように舞込む毎日の手紙も、また反古紙（ほごがみ）まで一々丹念に区わけし、或は渋（しぶ）を塗って保存するなど、昔の貧乏武士がやった通りを、位人臣（ぐらいじんしん）を極めた日まで実行している。細紐（ほそひも）の類いに至るまで無駄にせず、束ねておいて何かの役に立てた。」―（「齋藤實追想録」より一部抜粋）實の几帳面さが垣間見えるエピソードです。

９月１日（日）から 12 月１日（日）まで、当館２階北側で開催するミニ企画展『斎藤夫妻の日用品』では、このほかにも實が使用していた携帯用食器類や剪定鋏み、春子夫人が使用していた呼鈴や石鹸など、48 点を展示します。

秤と瓢箪型の木製ケース

分銅